

# 〈気概〉の概念再考

——プラトンの『国家』439e-441c——

西尾 浩 二

## 序論

プラトンが『国家』で提起した魂（あるいは心、ギリシア語でプシユケー）についての理論は、周知のとおり、「人間の魂（心）は欲望的部分と気概的部分と知的部分という三つの部分からなる」という「魂の三分説」である。「国家と魂の類比」などの関連する問題をひとまず脇へ置いて、この説そのものを純粹に魂（心）についての理論としてみた場合、もっともわかりにくいのが気概の部分であろう。欲望的部分や知的部分と並べられる気概的部分が何を表しているのかを適切に理解できなければ、この説そのものも、この説を軸に展開されるすべての議論も、われわれは適切に理解することができないだろう。そこでこの論考で

は、『国家』第四卷の三分説論証（439e-441c）、とりわけ気概的部分に関する議論（439e-441c）とそれに対する代表的な批判を集中的に検討し、気概（気概的部分）の概念がいったい何を表しているのかを明らかにすることで、この説の見通しをよくすることに努めたい。それによって、教育論などの関連する議論がどのような理論的背景のもとに展開されているのかについても、その一端が明らかになるだろう。

## 一 プラトンへの批判——気概的部分の何が問題か

「正義とは（また不正とは）何であるか」を示し、「正義が不正よりも有利である」ことを論証するという『国家』全体の考察課題を遂行する途上で、「魂は三つに区分されるかどうか」という問題（魂の三分説）が次のように提起される。

われわれは、われわれの内なるある一つのものによって物を学び、また別のものによって気概にかられ、さらにまた第三のものによって、食べたり生んだりすることや、すべてそれに類することにまつわるさまざまな快楽を欲望するのであるうか、それとも、われわれが行動を起こすときにはいつも、われわれは魂全体によつてそれらひとつひとつの行為をするのであらうか (36a<sup>b</sup>)<sup>10</sup>。

この問題提起の仕方は、三区分論証のさしあたりのねらいが、人間を行為へ動かす動機とその源泉を分析することにあるということを明らかにしている。つまり、魂が理知的・気概的・欲望的という三つの「部分」(プラトンの別の言い方では「種族」や「種類」)からなるという考えは、ものを学ぶ・気概にかられる・食べたり生んだりするといった行為への動機とその源泉を三つに区分する説というように、さしあたりは動機とその源泉についての理論としてとらえられるのである。それぞれがさらに身体の三つの部位(『ティマイオス』(69c-70c)の記述によれば理知的部分が頭部、気概的部分が心臓部、欲望的部分が腹部)に局在するとプラ

トンが真剣に考えていたかどうかについては、心身の連関に関する問題として興味深いが、三区分論証の枠を越える別の問題である。

それでは、このように魂の三区分説を動機とその源泉についての理論としてみた場合、気概的部分と訳される「ト・テューモエイデス」、あるいは気概と訳される「テューモス」というギリシア語でプラトンが呼ぶものは、いったい何であらうか。「怒りなどの感情」(によつて人を動かす部分)がそれである、という答えが考えられるかもしれない。しかし気概的部分を、怒りあるいは一般に感情が生じる源泉と規定するのは、事柄を単純化している。プラトンが気概的部分に帰している心理現象は、第四巻で取り上げられるさまざまな怒りに加え、名誉心や勝利欲(581b2, 586c8)、妬み(586c8)、強情(590a9)、気難しさ(586c5, 590a9)などであつて、怒りだけでもなければ感情のすべてでもないからである。とすれば、気概的部分は、理知的部分と欲望的部分と区別されるひとまのりの動機あるいは動機の源泉といえるのだろうか、それとも、人間心理の分析に基づくものではなく、「国家は三階層からなるという国家に関する」既定の結論にあうように作られた「まがいの

(factious)」「ひくりもの (artificial)」(Cornford 1912: 263-4) にすぎないのだろうか。「まがいもの」とみなす陣営<sup>2</sup>がプラトン批判のおもな論拠とするのは、怒りなどの単純な感情と名譽心などの複雑な感情をプラトンが混同し、さらにそれを感情のひとつに過ぎないにもかかわらず欲望や理性と並ぶ大きな部分とみなしていること (Cornford)。<sup>3</sup> また、気概的部分を割り出すためのプラトンの議論が「きわめて貧弱」であって、むしろ『国家』第十卷 (602e, 603d) では三分ではなく「理知的部分と非理知的部分」という二区分になっていること (Penner 1971: 111-3) である。そして、論拠の「きわめて貧弱」な「まがいもの」を、なぜプラトンが導入するのかといえば、気概のある戦士からなる「補助者の階層」を説明するためであったというのである。こうした指摘は区分論の要点を突いており、考察の手がかりとなる。そこでまず、プラトンの議論のどこに弱点があると批判されるのか (ここではおもに Penner の指摘) を、議論の進行を大まかにたどりながら確認したい。

三分論証でのプラトンの基本的主張は、魂 (心) のうちに葛藤があるなら魂は単一ではありえないというものである。この主張を裏づけるために仮定として議論に導入さ

れるのが、矛盾律に似た次のような原理である。

① 同一のものが、② 同一の部分で、③ 同一のものとの関係で、④ 同時に相反することをしたりされたりすることはできない (436b8-9: これを「対立者の原理」と呼ぶことにする)。

プラトンはこの原理をいくつかの具体例で説明しているが、一番わかりやすいのは「弓を射る人」の例 (439b8-11) である。① 弓を射る人が、② 同一の手で、③ 弓を、④ 押しやると同時に引き寄せることはできない。したがって、押しやる手と引き寄せる手は② 同一の手ではなく、正確には② 異なる二本の手であることが帰結する。この例と同様にして、魂についても異なる二つの「部分」が導かれるという。たとえば、のどが渇いて飲み物を飲みたいが、何らかの理由 (健康によくないなどの理由) から飲みたくなという魂 (心) の葛藤を想定すれば、対立者の原理から、① その人の魂は、② 同一の部分で、③ 飲み物を、④ 飲みたい (飲むことを欲する) と同時に飲みたくな (飲まないことを欲する) ということはありえない。したがって、飲むこと

を欲するものと飲まないことを欲するものは、②同一の部分ではなく、②異なる二つの部分であることが帰結する。プラトンの記述によれば、一方が「魂がそれによって理性的に推論する」「魂のなかの理性的部分（ロゴスティコン）」（439d5）であり、他方が「魂がそれによって恋し、飢え、渇き、その他もろもろの欲望を感じて興奮する」「非理性的な欲望的部分（エビテューメーティコン）」（439d68）、要するに肉体的快楽などをめざす欲求またはその源泉である。

それでは、「われわれがそれによって気概にかられる」部分は、理性的部分が欲望の部分のいずれかに属するのか、それとも両者と異なる第三の部分なのか。欲望的部分に属するという対話相手の答えに対して、プラトン（の描くソクラテス）は一見奇妙な話を持ち出して反証する。レオンティオスという人物が死体を見たいという（性的倒錯とも解されうる）欲望に襲われ、心の中で葛藤したが結局欲望に負けたという。「怒りは時によって欲望と戦う」ことを示すこの話に「対立者の原理」を適用すれば、「この戦い合うものどうしは互いに別のものである」こと、つまりこの怒りの出所が欲望的部分と異なることが帰結するのである（439c-440a）。

だが、それが理性的部分とも異なるというためには、さ

らに別の例証が必要となる。なぜなら、プラトンは続けて、怒りが欲望とただ戦うのではなく「理性の味方」として戦うこと（440b）を強調するからである。たとえば、自分が不正をされていると思う場合、「その人は心を沸き立たせ、憤激し、正しいと思うことに味方して戦い」「自分の内なる理性（ロゴス）によって呼び戻されて宥められる」までその戦いをやめないだろう（440c7）という。プラトンが指摘しているのは、怒りには何らかの理由があるということ、その理由に思い違いがあれば怒りは別の正しい理由（ロゴス）によって鎮められるということである（怒りの合理性）。この指摘は正当であるが、しかし、このように怒りの合理性を強調するならば、怒りの出所とされる気概的部分は理性的部分の一種ではないのかという疑問が生じざるをえないのである。

そこで、この疑問を解消するために、プラトンは別の例証を試み二つの論拠を提示する。ひとつは、理性の働きをもたない生後すぐの子どもやある種の野生動物も気概に満ちているということ、もうひとつは、「彼（オデュッセウス）は胸を打ち、こう言って心臓（こころ）をとがめた」というホメロスの言葉が示す事態である（441a5c3）。



だがこのうち、ひとつめの論拠が弱いことは、プラトンの批判者が指摘するとおりである。なぜなら、第一に、これは心の葛藤から区分を導くための基準（対立者の原理）とは無関係の事例だからである。子どもや野生動物に一方（気概）が備わり他方（理知）が備わっていないのであれば、両者の間にいかなる葛藤もありえないのだから、両者が別々であるという結論も導かれない。むしろ気概そのものから理性的な働きが（のちの教育などにより）生じるとも考えられなくはない。第二に、たとえひとつめの論拠から理知的部分と区別される何らかの「気力のある部分」が割り出されたとしても、それが欲望の部分でなくて、レオンティオスの例で割り出された気概的部分と同じであるという保証はない（Penner 1971: 111-2, Hardie 1986: 141）。

焦点はふたつめの論拠、「彼〔オデュッセウス〕は胸を打ち、こう言って心臓（こころ）をとがめた」というホメロスの言葉に移る。だがこれも「大した議論ではない」（Penner 1971: 112）と一蹴される恐れがある。この言葉が置かれている文脈は、主人である自分を裏切った召使いたちに対してその場で罰したいという怒りに駆られたオデュッセウスが、しかし復讐計画の成功のために「耐えよわが心臓！か

つてはさらにひどいことにも耐えたものを」と言って胸を打つ場面であるが、この場面にプラトンは心の葛藤をみてとり、こう解釈する。

この箇所ではホメロスは明らかに、二つの心の動きを互いに別のものとして語りながら、事の善し悪しを理知的に推論した一方の部分が、他方のただ盲目的に、憤慨する部分を、叱りつけているさまをえがいているのだ（441b-c）。

オデュッセウスの心が召使いたちに対して葛藤し、このように二つに引き裂かれているというのだが、問題は、なぜ「盲目的に憤慨する」と記述されるものが欲望の部分と別のものといえるのかである。なぜなら、この説明は、「盲目的に憤慨する」部分が心臓部に位置づけられているという点（これは魂の区分論と別の問題）を除けば、欲望の部分特定する際の記述とそっくりだからである。「（どうするのが）より善いか・より悪いかを理知的に推論（アナロギサメノン、441c）」せずに「盲目的に（アログイストース、441c）憤慨する」部分（気概的部分）が、「理知的に推論（ロ

ギゼタイ、439d)「せずに欲求する「非理知的な（アロギストン、439d）」部分（欲望的部分）」とどうして区別できるのかという疑問が生じざるをえないのである。

ここまでで確認されたことは、要するに、プラトンの当該議論の要点は、気概的部分が合理的側面（理知的部分に味方する態度）と非合理的側面（理知的部分に逆らう態度）をあわせもつという中間的性格にあること、そしてプラトンの議論に対する批判も、気概的部分のこの中間的性格に照準を定めているということである。批判者はそこに目をつけて、プラトンの議論の仕方ではその合理的側面を理知的部分に、非合理的側面を欲望的部分に回収してしまえるのだから、実質上は気概的部分をはずした二区分ですむのではないかと疑問を呈したのである。

## 二 プラトンからの回答——ひとつの解釈

前節でみた批判に対して、プラトンの側からどのような回答がありうるだろうか。それを探るためのひとつの方法は、気概的部分に属するとされるさまざまな心理現象に共通する特性、しかも他の部分にみられないような特性を見つけることである。そのさい、気概的部分を例証するため

にプラトンが最初に出す例、レオンテイオスの一見奇妙な逸話が、気概的部分を適切に理解するための手引きとなる。

いつかぼくはある話を聞いたことがあって、それを信じているのだよ。それによると、アグライオンの子レオンテイオスがペイライエウスから、北の城壁の外側に沿ってやって来る途中、処刑吏のそばに死体が横たわっているのに気づき、見たいという欲望にとらえられると同時に、他方では嫌悪の気持ちをはたらいて、身をひるがえそうとした。そしてしばらくは、そうやって心の中で闘いながら顔をおおっていたが、ついに欲望に打ち負かされて、目をかっと見開き、死体のところへ駆け寄ってこう叫んだというのだ。『さあ、お前たち、呪われたやつらめ、この美しい観物を堪能するまで味わうがよい』（439c-440a）。

この逸話をプラトンは「怒りがときに欲望と戦う」ことを示す例としているが、それはたんなる怒りではない。死体を見たいという自分の醜い欲望（に駆られる自己）に向けられているように、この怒りは自己嫌悪であり、多くの

解釈者たちが解するように、「恥（羞恥心、慎み・アイドース、アイスキュネー）」の感情に近いものとして理解するのが適切であろう。少なくとも『国家』を中心とする中期対話篇でプラトンは、この「恥」の感情を気概的部分に帰属させているとみられ、とくに『国家』とほぼ同じ時期に書かれたと推測される『バイドロス』ではこの点を明確に打ち出している。馬車に喩えられる魂の三部分「御者・理知的部分・よい馬（気概的部分）・悪い馬（欲望的部分）」のうちで、気概的部分に相当するよい馬が「節度と恥（アイドース）をあわせ持った名誉の愛好者」（933d6）とされ、恋人を前に欲情する悪い馬（欲望的部分）と対立葛藤する局面、つまりレオンティオスの葛藤と同じ局面で恥の感情がいかに働くかが描写されているのである（254a256a）。

では、そもそも恥とは何か。『国家』よりあとに書かれた晩年の対話篇『法律』で、プラトン自身が恥の概念を規定している。それによれば、恥とは一種の恐怖であり、「なにか立派で（美しく、カロス）ないことを行なったり言ったりすれば、悪評をこうむると思い、世評を恐れること」である（646e10-647a2）。こゝでは「カロス」というギリシア語が、「美しい」という美的観点からの価値評価と、「立派

である」という道徳的観点からの価値評価という両方の意味を含んでいる（広義の美醜）。また同様の恥の概念はアリストテレスにもみられる。たとえば『弁論術』での規定によれば、「恥（アイスキュネー）」とは、現在・過去・未来のさまざまな悪いことのうちで、悪評をもたらしように見えることをめぐる一種の苦痛あるいは動揺」のことであり、「恥がこのように規定されるとすれば、悪いことのうちで自身や自分が気にしている者に醜悪であると思われるかざりのものについて恥じることに必然的になる」のである（『弁論術』第二巻第六章 1383b12-18）。

ここで注目したいのは、このような恥の概念に含まれる二つの要素、(1)（広義の）美醜の価値評価の視点と(2)世評（思わく）への恐れ（関心）である。この二つの要素が『国家』のレオンティオスの例にも見出せるのである。まず美醜の価値評価の視点は、欲望に負けて死体のそばへ駆け寄ったレオンティオスが両目に向かって「この美しい観物を堪能するまで味わうがよい」と叫ぶせりふに、皮肉な仕方で示唆されている。死体が「美しい」という皮肉の裏にある真意は、死体を見たいという欲望（に従う行為）が「醜い」という価値評価なのである（Burnyeat 2006: 11, Hobbs

2006: 17)。恥の概念に含まれるもうひとつの要素である「世評（思わく）への恐れ（関心）」は、敷衍しているなら、自分の言動が他者からどのように見られ（思われ）ているかという自己像（自己イメージ）への関心である。たとえばレオンテイオスが気にするのは、目の前にいる処刑吏という他者の目に映る自己像である。しかし同時に、恐れ（関心）の対象は、彼自身のうちに内面化された他者の目に映る自己像でもあろう。アリストテレスが恥の対象を「自分、自分、自分が気にしている者に醜悪であると思われるもの」と述べるように、われわれは誰もいないときにもみずから恥を覚えることがあるが、それはわれわれが内面に他者の目をもつためであらう。

以上のことを考慮するならば、レオンテイオスの怒り（自己嫌悪）は恥の感情と密接に結びついたものであり、「自分は美しい（立派な）人間でありたい」という理想の自己像を内なる醜悪な欲望により傷つけられたために生じた、と考えることができるだろう。気概的部分の例証のためにプラトンがあげた最初の事例から、解釈の方向性がこのように示唆された。

では、その次にプラトンが出す例、不正をされていると

思う人の怒りや憤慨（440c-c<sub>2</sub>）についてはどうか。不正に憤慨する人が飢えや寒さなどの苦難に「じっと耐え忍んで、勝利を収め……その気だかい闘いをやめようとはしない」という記述は、のちに気概的部分が「勝利を愛する部分」「名誉を愛する部分」（381b<sub>2</sub>）と呼ばれる伏線ともなっているように、名誉と怒りの結びつきを強く示唆するが、恥と名誉はともに理想の自己像を前提とする点で共通する概念である。そこで、価値評価の視点が美醜から正不正に移っているが、これもさきのレオンテイオスの怒りと同じ方向性で理解できそうである。不正をされていると思う人に怒りや憤慨が生じるのは、他者の不正により、自分の名誉やその前提となる理想の自己像が傷つけられ、恥辱を受けたと思うからだというように。古代ギリシア文学におけるアイドース（恥）に関するある研究によれば、怒りを恥や名誉と密接に結びつけるこうした理解は、ギリシアの一般的理解に沿ったものでもあるのだ（Cairns 1993: 383）。

オデュッセウスの怒り（441b<sub>3</sub>-c<sub>2</sub>）についてはどうか。「盲目的に」憤慨したという以外にプラトンは多くを語っていないが、それはこれまでに提示された事例に準じるとみなしているからだと推測される。もしそうだとすれば、オデュッ

セウスが盲目的に憤慨したのは、王として主人としての彼の理想の自己像が召使の裏切りによって不当に侵害され、自尊心を傷つけられたためであるというように、これまでと同様の仕方では理解しても的外れではないだろう。

それでは、子どもやある種の野生動物の気概(441a7-b3)についても同様に理解できるだろうか。これについてはほかの場合とちがひ、美醜や正不正の価値評価を伴う自己像という観点から直接に説明するのは難しいだろう。なるほど、子どもと野生動物がみせる気性の激しさや攻撃性を、怒りなどと類似するもの(Gosling 1973)・怒りなどへ発達しうる萌芽的なもの(Annas 1981; Cooper 1984)などと考えることはできるかもしれない。しかし、そういった解釈は結局のところ、プラトンがこれらの例を気概の典型とみなしていないという推測を強めるものである。状況証拠(この例だけ対話相手が主導するようにみえること、ソクラテスはこの例に同意するが論じずに別の例に移ることなど)もこの推測を示唆する。その背景には、これらの例が対立者の原理の適用外であることのほかに、欲望との明確な区別が難しいというプラトンの判断があるかもしれない。この点で注意されるのは『パイドロス』の一節である。恋人

を前に「恥じらいと驚き」にとらえられるよい馬を、欲情する悪い馬が「怒りを破裂させて」ののしつた(254c)と描写されている。ある種の怒りを欲望的部分の側にも認めるこの描写は、プラトンの不注意やルーズな表現でなければ、気概的部分をたんなる怒り以上のものと考えべきことを示唆している(Williams 1973: 116-7)。このことは、気概的部分に帰される怒りを恥や名誉との密接なかわりのもとに理解する見方を裏書しているかもしれない。

これまでの考察にしたがえば、要するに気概的部分とは、「美しさ」「正しさ」の点で自分が他者からどのように見られ(思われ)たいかという「理想の自己像」に基づいて人間を行為へと動かすような種類の動機あるいは動機の源泉のことである。そこから環境や状況に応じて、これまでみてきた怒り、憤慨、恥、名誉心のような典型的なものから、本稿では取りあげなかった妬み(386c3)、強情(390a9)、気難しさ(386c5, 390a9)のような逸脱形態のものまで、さまざまな心理現象や性格が生じるというのがプラトンの考えだろう。最近の研究動向も、細かい違いを無視すれば、こうした気概理解を採用する傾向にある<sup>3)</sup>。あるいは、プラトンが気概としてひとまとめにとらえようとしたものは

「われわれ人間が社会的動物だからこそ、もつ反応的態度や欲求や傾向性」である (Burnyeat 2006: 22) というように、怒り、憤慨、恥、名誉心などが他者との関係を含むことに着目して人間の社会性を示すものとみる解釈も、同じ延長線上にあるとみてよいだろう。

さて、こうした気概理解を踏まえるなら、ほかの二部分との区別はどうなるだろうか。まず欲望的部分は、おもに肉体的快楽をめざすものであるから、明らかに自己像をもたないという点で気概的部分と区別される。次に理知的部分分は、何らかの自己像をもつかもしれないが、「[「どうするの」]より善いか、より悪いかを理知的に推論する部分」(441c1) と記述されるように、「善いこと」をめざすという点で、名誉や勝利などを含む「美しいこと」「正しいこと」をめざす気概的部分とは区別される。ここでさらに、この「善いこと」をめざすという対比点を、「真実を知ること」をめぐす (581b5-6) という理知的部分の別の特性を考慮して敷衍するならば、理知的部分がめざすのは「本当に善いことを知ること」であるのに対し、気概的部分がめざすのは「美しい(正しい)と思われること」であって、それが本当に美しい(正しい)かどうかを知ることには関与しない、と

いうことができるだろう<sup>4</sup>。たとえば「不正をされたと思う場合」、人は「正しいと思われることに味方して闘う」(440c7-8) のであって、本当に正しいかどうかを知るのは理知的部分の働きなのである (cf. 82c-c)。善に対する人々の態度を正しさや美しさに対する態度と比較して、プラトンはこう述べている、「正しいことや美しいことの場合分は、たとえ実際にはそうでなくても、そう思われるものを選ぶ人が多い」「しかし善いもの場合は、もはや誰ひとりとして、自分の所有するものがただそう思われているというだけでは満足できないのであって、実際にそうであるものを求めるのだ」(505b5-9) と。プラトン流の心のとらえ方(魂の三分説)は、人々のそうした実情をも、まちがいに視野に入れていられるだろう。

では、気概的部分がめざす「美しいこと」「正しいこと」とは、どのようなものだろうか。最後に本稿で確認された気概理解を背景に、教育や社会生活のあり方に関するプラトンの記述の一端を参照して、このことをみておきたい。プラトンは哲学的論駁の乱用をいましめる箇所<sup>5</sup>で、法習(ノモス)を念頭に置いてソクラテスにこう語らせる。

われわれは子供のときから、正しいことや美しいことについて、きまった考えをもたされていると思う。われわれは、ちょうど親のもとで育てられるようにして、それらの考えのなかで育てられてきているのだ。その權威に服し、それを尊重しながらね (338c)。

また第二・三巻の初等教育論でプラトンは、音楽・文芸による教育が「理を把握することができない」段階の子どもの自己形成にいかになき効果を及ぼすかについて、美醜の対概念を用いてソクラテスにこう語らせている。

そこでしかるべき正しい教育を与えられた者は、欠陥のあるもの、美しく作られていないものや自然において美しく生じていないものを最も鋭敏に感知して、かくてそれを正當に嫌悪しつつ、美しいもの（カロン）をこそ賞め賛え、それを歎びそれを魂の中へ迎え入れながら、それら美しいものから糧を得て育まれ、みずから美しいすぐれた人となるだろうし、他方、醜いもの（アイスクロン）は正當にこれを非難し、憎むだろうから——まだ若くて、なぜそうなのかという理（ロゴス）を把握する

ことができないうちからね。やがてしかし理が彼にやってきたときには、このように育てられた者こそは誰にもまして、その理と親近な間柄となっているためにすぐ識別できるから、最もそれを歎び迎えることになるだろう (401c-402a)。

これらの箇所やほかの箇所での説明から推測すると、理を把握するまえの子どもの魂も、またしばしば大人の魂も、そのあり方は、おそらくアリストテレスが『ニコマコス倫理学』（第一巻第四章 1095b）で示唆する「こと（事実）」を知っているが『なぜ（理由）』を知らない人の状態に似ているとプラトンは考えている。その状態とは、「美しいこと」「正しいこと」についてすでに習慣によって立派に育てられているために、たとえば「人を殺してはならない」という「こと」はわかっているが、「なぜ」そうなのかという理由を説明できないような状態である。この「美しいこと」「正しいこと」の具体的内容には、「人を殺してはならない」などのように法律に規定されることだけでなく、「若い者は年長者のそばではしかるべく沈黙していることとか、立ち上がって席を譲ること」(425b1-2) などのように法律に規定されない些細な

習わしまで、さまざまなものが含まれるだろう。このきわめて広範囲にわたる「美しいこと」「正しいこと」に対して、われわれはしばしば、それが本当に美しい（正しい）かどうかを知らずに「その権威に服し、それを尊重しながら」他者とともに社会生活を営んでいるのである。

気概を魂の部分として割り出すためのプラトンの議論は、たしかにわかりにくいかもしれない。しかし、プラトンの議論が想定する区切り方をわれわれが適切に理解すれば、はじめにみたようなプラトンへの批判が的外れであることは明らかであろう。批判者はプラトンの議論を「きわめて貧弱」(Penner)と論難し、導入される気概的部分を「まがいもの」(Cornford)と断定するが、けっしてそうではない。むしろ気概的部分は、他者との関係を前提とする社会性の動機が人間の行動にとても大きな役割を果たしているという現実を踏まえたものであり、誤解を恐れずに言うならば、いわば「社会的自己」を担う部分なのである。

この種の動機を人間の主要な動機のひとつに数えるのは、けっして奇抜なことではない。げんに「理想の自己像をめざす衝動」という考えについては、近現代の思想や心理学のなかにも、それぞれ独自の仕方ではあるけれども、類

似の思考を見出せるのではないかという指摘がなされている。それはたとえば、プラトンの批判者と一般に解されるニーチェの「力への意志」論のある局面や、アドラー心理学で中心的役割を担う「自尊心感情（の増大への衝動）」という概念、あるいはフロイトの超自我（自我理想）の概念などである (Hobbs, 2006: 41-9)。<sup>5)</sup>

いずれにせよ、「魂の三区分説」をひとつの軸として展開される『国家』を以上のような観点から読み直すならば、『国家』をその点で高く見積もる評価、「われわれ人間は本質的に社会的動物であるという事実を真剣に受け止めた、哲学の歴史で最初の著作」(Burnyeat, 2006: 22)であるという評価を、われわれも共有できるのではないだろうか。

## 結論

本稿では、魂は欲望的部分と気概的部分と理智的部分からなるとする「魂の三区分説」をとりあげ、とくに気概的部分を割り出すプラトンの議論とそれに対する批判に焦点を絞って検討した。まず確認されたのは、プラトンの議論も、それに対する批判も、合理的側面と非合理的側面をあわせもつという気概的部分の中間的性格に照準を定めていると



いうことである。気概的部分を「きわめて貧弱な」議論しかなされていない「まがいもの」であるとする批判もそこから生じる。次に、この批判に対するプラトンの側からの回答を引き出し、気概的部分が何を表しているのかを探り出すために、プラトンの議論をそこで挙げられる事例に即して分析した。分析の結果、プラトンが気概的部分に関して挙げる怒りの典型的事例はたんなる怒りではなく、恥や名誉と密接に結びついていることがわかり、そこから、気概的部分とは、「美しさ」「正しさ」の点で自分が他者からどのように思われたいかという「自己の理想像」に基づいて人間を行為へ動かす動機あるいは動機の源泉であることが明らかにされた。これにより、気概的部分が心理学的根拠のない空疎な「まがいもの」ではないことが立証された。この分析結果をもとにさらに考察を進めた結果、教育論などの関連する議論がどのような理論的背景のもとに展開されているのかについても、その一端が明らかになった。気概的部分に関する以上の所見が立証されたのは『国家』『パイドロス』などの中期対話篇においてであり、プラトンが晩年の『法律』でも同じ見解を維持しているか否かについては別の論考を要する。

## 註

- 1 テクストはオックスフォード古典叢書のバーネット版プラトン全集を用い、翻訳は岩波版プラトン全集に準拠する。本文と注で参照される文献の指示は、論文末尾の文献表に基づく。
- 2 Cornford (1912), Hardie (1936), Penner (1971), Robinson (1970) が代表的である。
- 3 そのいくつかを列挙する。気概的部分は、「人が自身自身についてもつ像（イメージ）や、他者にその像を共有してほしいという欲求にかかわる、さまざまな感情を含む」（Klosko 1986: 68）。「自己と理想（あるいは善）への何らかの関与を含む」（Annas 1981: 128, Reeve 1988: 136）。「競争心および、自己尊敬と（その通常の前提として）他者からの尊敬を望む欲求」（Cooper 1984: 145, Kamtekar 1998: 330-1）。「名誉の概念の前提となる自己自身の理想と密接に関連し、名誉への欲求や、自分自身についての理想に及ばなかった人の怒り、自己像が他者の目からは擁護されなかった人の憤慨を含む」（Cairns 1993: 383）。「何が美しく気高いかの観念にしたがって自分自身の理想像を形成する傾向性」を中心とする（Hobbs 2000: 30）。
- 4 この点については、二〇〇八年度大谷哲学会冬季研究会で本稿の草稿段階のものを発表した際に、質疑応答の場で示唆をいただいた。
- 5 この点に関連して、ベルクソンも『道徳と宗教の二源泉』

で類似する考えに触れているという指摘を、二〇〇八年度大谷哲学会冬季研究会の質疑応答の場で行った。同書第一章で「社会的自我」とも述べてスルクソンが考えていることは、指摘のとおり、プラトンが気概的部分によって示唆しようとしたものにも通底しているかもしれない。

## 文献 (本文と注で参照されたもの)

- Annas, J. (1981) *An Introduction to Plato's Republic*, Oxford: Clarendon Press.
- Burnyeat, M. F. (2006) "The Truth of Tripartition", *Proceedings of the Aristotelian Society* 106: 1-23.
- Cairns, D. L. (1993) *Aidos: The Psychology and Ethics of Honour and Shame in Ancient Greek Literature*, Oxford: Oxford University Press.
- Cooper, J. M. (1984) "Plato's Theory of Human Motivation", *History of Philosophy Quarterly* 1: 3-21, in his *Reason and Emotion: Essays on Ancient Moral Psychology and Ethical Theory* (Princeton: Princeton University Press, 1999): 118-37.
- Cornford, F. M. (1912) "Psychology and Social Structure in the *Republic* of Plato", *Classical Quarterly* 6: 246-65.
- Gosling, J. C. B. (1973) *Plato*, London, Routledge and Kegan Paul: Boston.
- Hardie, W. F. R. (1936) *A Study in Plato*, Oxford: Clarendon Press.
- Hobbs, A. (2000) *Plato and the Hero*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kantlekar, R. (1998) "Imperfect Virtue", *Ancient Philosophy* 18: 315-39.
- Klosko, G. (1986) *The Development of Plato's Political Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Penner, T. (1971) "Thought and Desire in Plato", in Vlastos, G. (ed.) *Plato: A Collection of Critical Essays, II: Ethics, Politics, and Philosophy of Art and Religion*, New York: Doubleday and Company: 96-118.
- Robinson, T. M. (1970) *Plato's Psychology*, Toronto: University of Toronto Press.
- Reeve, C. D. C. (1988) *Philosopher-Kings: The Argument of Plato's Republic*, Princeton: Princeton University Press.
- Williams, B. (1973) "The Analogy of City and Soul in Plato's *Republic*", in Lee, E. N., Mourelatos, A. P. D., and Rorty, R. M. (eds.), *Exegesis and Argument: Studies in Greek Philosophy Presented to Gregory Vlastos. Phronesis Supplementary Volume I*, Assen: Van Gorcum: chap. 10.

付記 本稿は独立行政法人日本学術振興会平成二十年度～平成二十一年度科学研究費補助金(若手研究(スタートアップ)) (課題番号 20820049) による研究成果の一部である。